

日本人名の英語表記

The English Notation in Japanese Names

藤原 和彦*

Kazuhiko FUJIWARA*

キーワード：日本人名英語表記 姓・名 名・姓 アイデンティティ

Abstract

In Japan, students are used to being taught the ‘surname, given name’ style (Japanese style) with regard to name order in teaching English. I disagree with the Japanese style. I believe Japanese would be better off using the ‘given name, surname style (Western style)’. It’s more than thirty years since the Japanese style in English textbooks was adopted in junior high schools textbooks in Japan. In 1987 the Japanese publishing company, *Sanseido* adopted this system. The Japanese Language Council accepted this formally in the year 2000. Most Japanese people continue to use the Japanese style. Therefore the two ways, the Japanese style and the Western style, remain in use. I believe this system is a big problem and doesn’t work in internationally. I insist on the legitimacy of the ‘Western style’ and dispute the validity of the Japanese style.

1. はじめに

「ファーストネームでお呼びしていいですか」

天皇と大統領が話している横で、美智子妃はヴァレリーさんにこう語りかけた。「ファーストネームでヴァレリーとお呼びしてもいいですか。私のこともミチコと呼んでください。」ヴァレリーさんは「とんでもありません。とても失礼で、私は『皇后さま』としかお呼びできません」と答えた。皇后はヴァレリーさんの気持ちを察すると、それ以上は求めなかった¹⁾。

「姓・名」式を提唱する人が多くなってきている中で上皇后は「名・姓」の使用について

*大阪電気通信大学非常勤講師

て意識しておられると考えられる。世界中を公務で訪れ、日本と世界のことを考えておられることが理解できる。ある意味でこれは日本では特殊なことである。日本人が自ら海外の人たちに対して「名前で呼んでいいですか」などと言うことはあまりない。この記事を読んで少し驚いたが、私は同僚の外国人指導助手には名前で呼ぶことにしている。

名前で呼ぶことに抵抗がないと言えば嘘になる。日本人であれば年上の人、仕事仲間、そういった関係の人については「～さん、～君、～先生」と苗字で呼ぶ習慣があるからである。だからこれらの人たちに対して名前で呼ぶこと自体に抵抗があるのは仕方ないのかもしれないが上皇后自らご自身が「名・姓」の使い方を理解しておられたことは日本国民として学ぶべきことである。

『英米文学手帳』51号の論文を読んだ読者から下記のような感想文を得た。

上海法人を開設した際に英文の挨拶状を作成しろとなって、Aさんにチェックしてもらったら姓名の順に直されて、ええっと言ったら、実務の世界はこうです、それをBさんに事情説明してチェックしてもらったら、鼻で笑って名姓の順に直されて、Cさんに伺ったら、そんなんまだ定着していない、事務なら名姓だ、こっちではそうだ、再度Aさんに伺ったらこちらはこうです。こちらの文書はこうです、さて困ったと社長に委ねて、日本からの発信文書やから普通にしよう、名姓や、となった次第。小生に知識がないので往生しました²⁾。

社会で実際に海外の人たちと様々なやりとりを行う場面で使われるのは「名・姓」である。これを無視して「姓・名」を主張する人達の根拠はどこにあるのだろうか。「姓・名」の主張は世界に対して日本の価値観を押しつけているだけである。直視しなければいけないのは現実である。これを無視して「姓・名」を主張すべきでないとは私考えている。これは単に「姓・名」か「名・姓」かというだけの問題ではない。異文化理解や日本人の思想ということにも関わる問題である。これについては、世界中にも知られるところとなり、日本の印象をマイナスにしている感は否めない。そして日本人が「姓・名」で表記し始めるようになり、次第に「名・姓」式に疑問を持つようになることは自然なことである。「姓・名」式を支持する人達がこれを支持する理由として‘アイデンティティ’というキーワードがある。日本人は「姓・名」であるにも関わらず、英語ではどうして「名・姓」で名乗る必要があるのかという考えを持っておられる方もおられる。この論拠には納得できるように考えられるが、何故政府は「名・姓」式から「姓・名」式への指導に変更したのかを論じていくことにする。また何かの事情で日本に滞在することになったりした時には英語で書かれた書類が必要となってくる。そして彼らが必ずしも日本語を理解しているとは限らない。日本語を理解している人もいるだろうが、世界中どこの国に行っても英語の表記や案内はあるので、基本的に英語で書かれたものは用意しておくべきである。

2. 「名・姓」式が導入されるべき根拠

最初に「名・姓」式が導入されるべきであるという根拠を下記に記述する。

(1) 名を先に書くこと

假名ローマ字でとはいへ、日本人が署名するのであるから、日本流に姓を先に名を後から書く方が當を得たものかも知れないか、當否の問題は权置き、ローマ文字の署名の必要は主として欧米人に対する時であるから、彼等をして名を姓と誤解せしむるやうなことの無い為には、矢張欧米流に名を先に姓を後ろから書くべきである³⁾。

清水氏は日本人である以上名前を姓から始めることは当然のように思うかもしれないと前置きした上で、それでも名から書くべきであると根拠を明確に述べている。これを根拠にして「名・姓」の正当性を述べていく。

3. 文法としての「名・姓」

文法書には記載されていないが、私はこれが文法事項の一つだと考えている。その根拠は英語圏の人たちの名前が「名・姓」であり、これが今後「姓・名」になることは永久に無いからである。永久に変わりようのない事実であるなら私はこれを文法の一つとして認識することでこの「姓・名」か「名・姓」かという議論は終結することが可能であると考えます。文法であるからこれを勝手に「姓・名」にしたりすることがあってはならない。残念ながらこれを文法だと認識している日本人はまずいない。換言すれば文法という認識があれば「姓・名」というように勝手に変えたりすることはない。今後文法書にはこれを記載するべきであると提案したい。現在の英語学習で文法軽視が指摘されているが、これもその一つである。「文法」は読んで字の如く「文章の法律」である。「姓・名」方式でもいいではないかなどと言い始めれば、「三人称単数現在形(s)」、「複数形(s)」なんか無くても言いたいことは通じるから必要ないなど、そんなことを勝手に言い出したら、文法無視の教養のない表現しかできなくなる。そうなれば海外からは「日本人は所詮教養などない東洋人」などと思われてしまうことだろう。文法の重要性を私達日本は再認識するべきであると考えている。伏木(2020)は次のように述べている。

同じように、古い英語の時代には人名の表記にも of が使われていました。まだ、姓を名乗るのが一般的でなかった頃は、「**first name (名) of ○○○**」で、○○○には土地の名や職業など、その人を特徴づける事柄が修飾語としてあてられていました。例えば、「大工のブライアン」であれば、**Bryan Carpenter** と表記したのです。その後、多くの人々に姓が浸透するにつれ、大工の **carpenter** を姓にした人たちは「カーペンター家のブライアン」と呼ばれるようになり、さらに時代を経ていく中で of が欠落し、現在のように **Bryan Carpenter** といった表記になったのです。これが、英語で姓名を表記するとき名+姓の順番になる理由です⁴⁾。

このような分析は「名姓」の表記が文法事項であるとする何よりの証拠である。日本人の英語学習においては文法を基にして英語学習が進められており、これを勝手に「姓

名」と表記することは文法を無視することになる。文法無視，軽視の兆候は他にも見られる。例えば中学校の英語の教科書では品詞が「冠詞」と「助動詞」が品詞として扱われ、「八品詞」ではなく、「十品詞」として記載されている。いつから英語の品詞が「十品詞」になったのか私は知らない。少し話がそれたが，このような事実がある以上，「姓名」とすることは，文法を無視することであり，決してあってはならないことである。

4. 日本人の名前の特性を考える

下記は藤原（2013）からの引用である。

まず日本人の名前表記においては，姓，名の両方で呼び方が同じものがいくつか見られる。例えば「みき」という名前においては，姓では「三木」，名前では「美紀」，「美樹」など，「まどか」という名前においては漢字では「円」と書くが，これは姓，名の両方で使われている氏名である。「いずみ」という呼び方では姓では「泉」，「和泉」，「出水」，「伊豆見」などがある。名でも「泉」，「和泉」。それから「みなみ」という名前では姓では「南」，「波」などが使われ，名では「美波」。姓と同じように「南」も使われたりしている。これらの例から分かるように基本的に日本人は名前表記では「名・姓」で名乗るという概念が外国の人達に徹底していれば，呼び方が姓，名で同じであっても，どちらが「姓」で，どちらが「名」であるかということを理解してもらうことができるが，「姓・名」と「名・姓」の両概念が混在してしまうと，姓・名で同じ呼び方が存在した場合，どちらが姓で，どちらが名であるかということの混乱を招く要因になることは想像に難くない。もっと分かりやすい例えを挙げるなら，「みき いずみ」という名前の人がいたとする。いろんな漢字の組み合わせが考えられるが「三木 泉」と表記するとする。もう一人「いずみ みき」という人いたとする。漢字で「和泉 美紀」と表記したとする。「名・姓」の概念が固定していれば，どちらの呼び方であっても混同することはないが，現状では「姓・名」の概念を持ち込むと，極論を言えば私のように「名・姓」主張派がいる中で二通りの表記の仕方が存在することになり，混乱の基になることが十分に考えられる⁵⁾。

上記で述べた通り，日本人の姓と名の名前には読み方が同じものがいくつか存在する。その例を上記のものも含めて記述しておきたい。

読み方	姓として使われる例	名として使われる例
みき	三木，美樹	美紀，美樹
まどか	円	円
いずみ	泉，和泉，出水，出海，伊豆見	泉，和泉，泉美，伊寿美
みなみ	南，三波	南，美波
はるな	春名	春奈，春菜，晴菜，晴菜

いつき	五木	樹
あおい	青井, 蒼井	葵, 碧依
みずき	水木, 水城, 瑞木	瑞樹, 瑞希, 美月
さつき	五月	五月, 皐月, 沙月, 颯希
まさき	正木, 間崎, 政木, 征木	正樹, 雅樹, 政樹, 真樹, 勝樹
ゆうき	結城, 有木	勇氣, 優紀, 有紀, 夕貴, 裕樹
なつき	夏木	夏樹, 菜月, 奈津季
たまき	玉木	環
うた	宇多	詩
あさひ	朝日	朝陽
まゆみ	真弓	真弓, 麻由美, 万由美, 満由実
やまと	大和, 山戸	大和

これらの例からも分かるように日本人の名前の特性を考慮せずに「姓・名」を導入することは多くの混乱を招く恐れがある。その一例を示しておきたい。

姓と名の順が日本と英語圏で逆であるせいであろうか。よく「ピーターさん」と呼ばれてちょっと戸惑う。私は日本では日本の習慣に従って姓, 名の順つまり「シュナイダー・ピーター」とサインすることもあるのだが, それをみて【「ピーター」が私の姓だと思うらしく】私のことを「ピーターさん」と呼ぶ人がいる。どうしたものだろうか⁶⁾。

名前というのは各国によって、特徴がある。日本においては日本人であっても姓か名のいずれなのか判断に迷うことがある。表からも分かるように名前によっては姓と名の両方で使われるものがあるという特性がある以上、これを考慮しないわけにはいかないと私は考える。こういった考慮を全く無視して「日本人は姓・名で名乗っているのに、英語になると逆にするのはおかしい」などと短絡的に考えるのは不要な混乱を招くだけである。こういう状況になることは十分に考えられることである。

5. 海外では通用しないという現実

次の引用は関口（2003）からである。

◆ 日本を出たら通用しません

こんなことまでして、なぜ今になって氏名の順番を変える必要があるのでしょうか？それともどのスキットも、その設定が「日本にきている外国人との会話」ということなので、敢えて日本語での順番を誇示しているのでしょうか？どちらにせよ、これでは大いに問題ありです。

英語での氏名を日本語のときと同じ「姓」を先「名」を後の順で教科書に取り上げたのは1987年度版刊行の「NEW CROWN ENGLISH SERIES」が初めてだっ

たとのこと。氏名こそが個人のアイデンティティーを一番確実に示すものなら、日本の文化を重んじ日本式、つまり、「姓」先「名」後であるべきだというのがその理由だそうです。

さらに、1999年12月の国語審議会でもこの考えが支持されたことから多くの教科書がそれに倣い、今回の改訂ではほとんど全部の教科書でこの方式を採用しているようです。氏名の言い方でも日本の文化を尊重すべき。これ自体はもっとものように感じられます。でも一歩日本を出たら、そんなことが通用するのでしょうか？「姓」を先に、そして「名」をということをかたくなに貫くことで起きる誤解はどうすればいいのでしょうか⁷⁾。

私はこの見解において次のような混乱が生じると考える。

- ① 「姓・名」で名乗った時、例えば相手からは、‘Mr.Kazuhiko’のように呼ばれる可能性がある。なぜなら世界の人々は日本の学校で英語における名前の表記方法が「姓・名」で教えられ始めていることなど知る由もなく、世界に無用の誤解を与えることになるからである。ではこの誤解をいかにして解決するか。関口は次のように見解を述べている。

◆名前の誤解はこうして解くしかない

たとえば、もし筆者が‘My name is Sekiguchi Toshiyuki.’または‘I am Sekiguchi Toshiyuki.’というように教科書方式で自身を紹介したとすると、事前に日本での英語教育事情を知らない外国人は100%の確率で‘Sekiguchi’をわたしのファーストネーム（名）、‘Toshiyuki’をわたしのファミリーネーム（姓）だと思い込むはずです。

そしてこの思い込みを回避するためには、自身の氏名を告げるたびに‘My name is Sekiguchi Toshiyuki.’などの後に‘By the way , Sekiguchi is not my first name. It’s my family name and Toshiyuki is my first name.’といったような何らかの説明が必要になります。それも毎回！

そしてもし説明を怠ると、あなたの氏名は永遠に「逆」のまま覚えられてしまいます。こんな手間を必要にしてまでも氏名の順序にこだわるのが文化を重んじることなのでしょうか？

英語を通して文化や習慣を教えるのなら、日本特有のものより、英語圏にまつわるものを取り上げるべきです。たとえば、ここでは“Sekiguchi, Toshiyuki”とコンマを一つ付けて「姓」を先に書くことや、順番はそのまま“Toshiyuki SEKIGUCHI”と「姓」の部分は大文字にすることで区別をはっきりさせることなど。

口頭では「名」を強調したいなら、“My name is Toshiyuki, Toshiyuki Sekiguchi.” 「姓」を強調したいのなら“My name is Sekiguchi. Toshiyuki Sekiguchi.”と単に一度だけ氏名を言うのではなく、ファーストネームまたはファミリーネームを二度繰り返すことで、どちらが「名」でどちらが「姓」かをはっきりさせる言い方。

男子の間では昔から、近年では女子の間でもそうあるように、学生でも社会人で

も親しくなればなるほど、ファーストネーム（名）でなくファミリーネーム（姓）で呼び合うという習慣。

また、面白いところでは、親が子供に対して、そして上司に対して、何かを戒めたり改まったことを告げたりするとき、ここぞとばかりに白々しくフルネーム（名→姓）を使って呼ぶ習慣など、実際に遭遇するであろうことなどを知るほうが大事ではないでしょうか⁸⁾。

関口の内容をまとめると話す時と書く時において、下記のそれぞれの表現方法が存在することになる。

話す時

- Toshiyuki Sekiguchi
- Sekiguchi Toshiyuki

* 「姓・名」で名乗る時は更に説明が必要になる。

書く時

- Toshiyuki Sekiguchi
- Sekiguchi Toshiyuki
- Sekiguchi , Toshiyuki
- Toshiyuki SEKIGUCHI
- SEKIGUCHI , Toshiyuki

以上のような表記法が考えられる。私がロンドンに観光で訪れた際、テレビをつけると「WELCOME KAZUHIKO FUJIWARA」（図1）という画面が出てきた。少し驚いたが、全て大文字で表記されていた。そしてその後、NHK WORLD を観ると“Taizo Nishimura”（図2）のように当たり前ではあるが「名・姓」で表記されていた。私自身は自分の名前の表記に対して当然のことだと考えているので、特に驚くということにはなかったが、全て大文字で表記されている固有名詞は様々な公共施設で見ることができる。私の名前を全て大文字で表記していたのには、おそらく一般の人とは異なるお客としてそのホテルに宿泊してくれた特別な人という意味合いがあると考えられる。‘Kazuhiko Fujiwara’ と表記されるよりは、このように大文字で全て表記されることの方が宿泊客にとっては気持ちのいいものである。

② 非合理性

須田（1988）に次のようなことが書いてある。

2月13日、同じ「手紙」欄は再び「英語の氏名」（この題目のつけ方は変だが）問題を特集した。4人のうち2人は「転位」反対論（あとの2人は別の問題に触れている）であり、企画報道室記者の大原悦子氏は、「手紙」欄の会議で開眼し、日本史を研究するハンガリー留学生に取材するなどしたあと、「自国の文化、習慣を“説明”することが、国際交流、理解このような必要な気がしてきました。今度名刺を刷る時は、裏側も氏・名の順にし、外国人には“前に書いてあるのがファミリー・ネームです”と説明しようと思っています」と「こだま」欄に書いた⁹⁾。

小寺(1991)も同様のことを述べている。

Yamada Taro という御順は、英語式の言い方ではないが、このような言い方もあるということを知らせるために、あえて出してみた。ちなみに、中国や韓国・朝鮮の人たちの氏名の表わし方は、英語の中に入れても苗字と名前が逆にならないのが一般的である。西欧の人たちに誤解を招くようなことが心配されるときは、I am Yamada Taro. 'Yamada' is my family name and 'Taro' is my given name. とつけ加えればよい (p.108) ¹⁰⁾。

関口の言うように「姓・名」で名乗ることがいかに合理性を欠いているか理解できる。「姓・名」を支持される方はこの誤解をどのように解決するのだろうか。関口の例にもあったように後から補足説明を聞いた相手はどう思うのだろうか。おそらく「何故そんな説明をする必要があるのか。最初から名・姓で名乗ればいいのに。」と相手は考えるのではないだろうか。日本人は 'mysterious' だと思われるかもしれない。これは単に名前の順番を変えるだけでなく日本の文化、日本という国を相手にどう印象づけることになるかということにも関わってくる。苦勞を惜しまない日本人の特性であるから仕方のない一面ではあるが、苦勞や困難等手間のかかることに対して辛抱強くできるところは長所ではある。しかし普通に考えればどちらが姓でどちらが名であるかなどといった説明を聞きたいと相手は思わないと私は思う。世界の共通認識として英語では「名・姓」で名乗ることになっているにも関わらずそんな説明を聞くのは時間の無駄である。相手を尊重した異文化交流にはほど遠い考えである。日本のイデオロギーを押し付けているだけであるということを知覚すべきである。

③ ホテルや飛行機の予約をする場合、トラブルが生じる場合がある。

渡航の際、税関やホテルでの氏名の記入は当然のことながらどこの国でも基本は「名・姓」であり、大きな混乱を招くことが予想される。日本のパスポートは「姓・名」で表記されているが、これは間違いであると私は認識している。なぜなら英語表記である以上「名・姓」で書かれるべきである。海外では基本的に（中国・韓国・北朝鮮・ハンガリーを除く）必ず「名・姓」で名乗らなければならないが、日本政府は海外在住の日本人にも「姓・名」で名乗るように強制するのだろうか。クレジットカードがローマ字表記で書かれている。私は VISA カードを 3 枚、マスターカードを 2 枚所持しているが、いずれも 'KAZUHIKO FUJIWARA' と「名・姓」で表記してある。他社のクレジットカードは所持していないが海外在住の日本人にもこれを強制すると経済的混乱を引き起こす可能性がある。これらのクレジット会社が「姓・名」方式にすることはないと考える。これらは世界中で使用されるものであり、日本だけのものではない。よって日本のカードだけ「姓・名」にすることなど不可能である。以上のようなことが弊害として考えられる。結果として現在は 'ダブルスタンダード' になっているが、いずれにしても「姓・名」方式で記入すると全く別人扱いになり、クレジットカード、銀行、飛行機の搭乗手続き、ホテルのチェックインなどのサービスが受けられなくなる可能性があるということを知覚しておきたい。

6. 右翼化, ‘nationalism’ の問題

柴山元文部科学大臣, 河野デジタル大臣 (当時は外務大臣) の声明を受けてイギリスの ‘Guardian’ と ‘The New York Times’ は次のように述べている.

Last name first , first name last : Japan minister tells foreign media to get it right

Taro Kono – or is it Kono Taro? – says journalists should treat Japanese politicians the same as their Chinese or South Korean equivalents ¹¹⁾.

Shinzo Abe? That’s Not His Name , Says Japan’s Foreign Minister

The foreign minister’s request comes at a time when the Japanese government is simultaneously nurturing a revival of nationalism and spearheading an effort to draw in more foreigners as the native Japanese population wanes ¹²⁾.

今回の河野発言に, 海外メディアも反応した. 英ガーディアン誌は日本の右翼化の一部と捉え, 「日本文化や歴史に誇りを持つ保守派安倍首相の影響と見ている人もいる」と述べている. 米ニューヨークタイムズ紙も「日本政府によるナショナリズムの復活があらわになっている」と報道している ¹³⁾.

これら二社の新聞社が述べているようにこれは単に ‘identity’ だけの問題ではなく, 日本人の思想を諸外国に押しつけることにもなる. 結果として日本の右翼化, ナショナリズムにつながっていくことになってしまうのである. イギリスの EU 離脱, トランプ前大統領の ‘アメリカファースト’, ヨーロッパ諸国の極右政治の台頭. これらの考え方は皆同じである. 以下は藤原 (2013) からの引用である.

最近アメリカが日本の「右寄り」を懸念しているようである. 「姓・名」の主張の根本は「欧米の表記通りに合わせる必要はない. 日本人の名前は姓・名の順序であるからわざわざそれをひっくり返すのはおかしい」という発想に基づくものである. 私はこの発想に ‘nationalism’ を感じる. 自然に自分の国に対して愛するという発想を持つこと自体はいいことだと思う. しかしそれを国家ぐるみで主張するのはどうかと考える. 憲法改正への動きも活発化している. 自衛隊を「国防軍」と改名しようという動きもある. この「姓・名」への主張はその一環のように感じる. 私の考えすぎだろうか ¹⁴⁾.

「姓・名」主張はどうしてもこれらの問題からは避けられないのである. このような摩擦を生じてまで ‘identity’ にこだわる必要はない. ここで須田 (1989), 酒井 (2008) 一宮 (2001) から「姓・名」式を主張する代表的なものを記述しておく. まず須田からの引用である. 左記の番号は引用元からの記述である.

2. ①個人的存在の民族的・文化的アイデンティティに係わることがらである。
<古川博巳氏>

6. 基本的に玉稿の趣旨に賛成です。まさに「名・氏」は日本の欧米崇拜主義、
本多勝一流に言えば“言語帝国主義”への屈服だと思います。
<宇野木洋氏>

26. 日本人としてのアイデンティティにかかわるものという御意見に賛成する
からです。
<岡節三氏>¹⁵⁾。

もう一つ須田が授業で担当している 37 名の学生に同様にとったアンケートの一部
を記載する。この 37 名の中で「名・姓」に賛成は 1 名だけで残りは「姓・名」に賛成
であった。左記の番号は引用元からの記述である。

- 9) 比較社会論を受講している関係で、氏名権についての話は大変興味深く思え
た。なるほどと考えさせられる点が数多くあり、identity に関しても改めて
見直さなければならぬとも思えた。(経済 2)
- 11) 名前の問題で日本人が西洋かぶれしていることが発見させられ、名前のも
つ意味に感動。(経済 2)
- 21) identity と自分の名前は思わず無視してしまうような問題のような気がし
た。日本人の名前がローマ字では名姓順で書かれるのは、日本が外国に支
配されていた。あるいは西洋文化の輸入国であるのだということを実感さ
せられる。(文 1) ¹⁶⁾。

この他にも「アイデンティティ」という言葉を使って「姓・名」支持をしていた生徒
が何名かいた。次は酒井からである。

姓名の言い方に関する結果は、「どちらでもよい」という回答が最も多く(31名,
47.7%)、本来型を選択した回答者は、「日本人だから」、「本来の呼び方だから」、
「わざわざ、そこまで英語に合わせなくてもよいとおもうから」など、個人や民族
のアイデンティティにかかわる記述がほとんどであった ¹⁷⁾。

これらの主張からも分かるように「姓・名」支持の一番の理由は‘アイデンティテ
ィ’であることが理解できる。日本人としてのアイデンティティを掲げることは確
かに大切ではあるが、その考え方は他人に押しつけるようなものではないし、英語
圏の人達の名前が「名・姓」式であるという事実がある以上、「姓・名」で名乗ると
いうのは自分達の考えを押しつけている以外なものでもない。中国や韓国が「姓・
名」で名乗っているのは、国の事情があるからであり、普段からいがみ合いを繰り返
しているこれらの国々に対してどうしてこの件だけ同調するのかと私は疑問に思う。
これらの国々が「姓・名」式にしているからというのは明確な根拠にはならない。須

田は同論文で次のように述べている。

同じ“漢字文化圏”でなぜ日本だけが欧米流に表記されるのか。アパルトヘイトの国で名誉白人の扱いを受けることに恥辱を感じなければならぬと同じように、自分の名前が自分の承諾もないまま転位されることに屈辱を感じなければならぬだろう。自分の意志で（たとえ無知であれ無関心であれ）転位してローマ字で書いたり口にしたるとき、自分の民族的アイデンティティを含む存在のありようはいささかも震えないであろうか。Takuboku Ishikawa ならいささかの違和感も覚えない人は、啄木石川にはどう反応するのでであろうか。25376414 は 64142537 と同じではなく、AB は BA とは違うのであり、まして人の名前は異なる番号や記号ではない。アイデンティティに深く係わり、人格としての存在の表徴なのである。敬語とか、対話のとき視線を合わせる合わせないとかの問題ではない。自己の文化なりコミュニケーションのパターンを一步も譲らないという問題ではない。単に異質性を固執するという問題ではなくて、人格的民族的尊厳に係わる問題であり、二重文化能力という、国際理解に欠かせない精神の在り方に関わる問題なのである¹⁸⁾。

須田は「漢字文化圏でなぜ日本だけが欧米流に表記されるのか。」と述べている。「名・姓」で名乗る韓国、中国そしてハンガリーの人達もいる。「承諾もないまま転位されることに屈辱を感じなければならぬだろう。」とあるが世界で既に「名・姓」で名乗ることが認識されている事実に対して屈辱を感じなければならぬ等と感情で言うことではないと私は考える。

須田は精神論で「名・姓」導入の反対を表明しているが“アイデンティティ”，“民族的尊厳”，“精神の在り方”などといった表現でまさにこれから戦争が始まるのではないかという物騒な言葉を並べて「姓・名」式の正当性を述べているが、現在もこのような精神論で「姓・名」の主張がなされていることは非常に残念である。「名・姓」は欧米から辱めを受けているといったような感情だろうか。欧米があらゆる面において優れているという考えは少なからず現在の日本には存在している。英語の理解においては異文化理解の説明を導入しなければ、本当の意味で英語は理解できない。鴻上(1997)は次のように述べている。

東京ディズニーランドで金髪のカツラをかぶって踊る日本人を見ても、僕達は何も感じません。カッコいいとさえ、思うかもしれません。

韓国のロッテワールドで、金髪のカツラをかぶって踊る韓国人を見たことがありますか？僕はあります。金髪カツラの中国人もフィリピン人も、僕は見たことがあります。見た瞬間、僕は恥ずかしくなりました。

それは、欧米文化にあこがれるとは、こういうことだと知らされたからです。そしてそれがぶざまなのに、カツラをかぶっている本人は、カッコいいと思っているのか分かるからこそ、よけい、恥ずかしくなったのです。

アジア人が、欧米文化圏の真似をしている別のアジア人を見ることほど、悲しいことはありません。

特に、日本人は、アジアの中で、率先して、欧米文化を受け入れてきた国です。別の言い方をすれば、欧米に文化的にレイプされた国です。自ら進んで、レイプされたとも言えます¹⁹⁾。

この文章は鴻上が自身の著書で、日本人の名前表記について触れたもので、欧米文化を取り入れたことに対する考えを著したものである。日本が欧米諸国から採り入れたことを「レイプされた」などと信じられない表現で著していることに憤りを感じる。更に鴻上は次のようにも述べている。

自分の姓名の順番さえも変えなくてははいけないくらい自分の国の文化を否定する考えの裏側は、なんでしょう²⁰⁾。

それは、欧米文化にひれ伏して、自分の姓名の順番を変えた国の人間にしか、考えられないことだったのじゃないかと極論したくなるのです²¹⁾。

「名・姓」で表現することが日本の文化を否定することになると述べているが、その根拠はいったいどこにあるのだろうか。そしてこれは欧米文化にひれ伏すことだとも述べている。本当にそうだろうか。しかし鴻上（2001）では次のようにも述べている。

実際、僕が日本人商社マンで、激しくプレゼンを戦っている立場なら、「カトウ・ケン」ではなく「ケン・カトウ」と名乗るかもしれません。「ケン」という名前をいち早く覚えてもらいたいからです。もっと進んで、欧米式の「トム」や「マイク」のニックネームを名乗るかもしれません²²⁾。

鴻上の発言は矛盾している。「姓・名」にするべきだと主張する一方で、仕事では名前を覚えてもらうために「名・姓」にするという、この‘double standard’を平気で使う勇氣は私には無い。日本という国は都合が悪くなるとこの考えをよく用いる傾向がある。「姓・名」を使用するべきだと主張するのなら、最後までその根拠を述べ、その正当性を述べるべきだと私は考えるが、鴻上の論拠はその意味で全く説得力がない。更にこれは他の考え方を排除し、その考えを押し通すために無理だと分かっているにもかかわらず突き進もうとする動きにもつながり、これは戦時中の考え方と同じである。

7. イングリッシュネーム

21世紀研究会編『人名の世界地図』に中国人の名前表記に次のように記載してある。

イングリッシュネーム

李小龍，陳美齡，成龍，林憶蓮，劉德華，黎明，周潤發，これらの名前をみて誰だかわかるようなら、相当の香港通である。

片仮名で書けば、ブルー・ス・リー、アグネス・チャン、ジャッキー・チェン、サンディ・ラム、アンディ・ラウ、レオン・ライ、チョウ・ヨンファ。いずれも香港を代表するスターたちだ。

台湾人でも、テレサ・テン（鄧麗君）、ヴィヴィアン・スー（徐若宣）などが英語名を使っているし、ビジネスマンのほとんどが英語名の入った名刺を持っている。

もとはごく少数の香港人エリートたちに限られていたイングリッシュ・ネームだが、一九六〇年代から七〇年代にかけて香港が急成長を遂げたことによって、英語が重視されるようになり、イングリッシュ・ネームが一般的になっていった。英語の授業のときに、先生が生徒に英語名をつけるパターンが多いという。またクリスマスチャンだと、洗礼名をそのまま使う人もいるし、両親がつける場合もある。むしろファースト・ネームだけで、姓はそのままである。

職場では、ふだんは、イングリッシュ・ネームでよび合うことが多い。

中国名だと、あっちにも黄先生、こっちにも陳小姐と同姓が多くて混乱するのだという。

香港人にとっても、複雑な漢字の名前より、英語の名前のほうが覚えやすいという。英語名は、ファーストフードの店員のネーム・プレートにもよく使われている。念のためにいっておくと、これはイギリス人に押しつけられたわけではない。あくまでも自然発生的な習慣なのだ。

イングリッシュ・ネームも世代を反映している。

かつては先生が『イギリス名前辞典』を片手にヘンリー・スティーヴン、ピーター・ウィリアム、マイケル・スーザン・ジョディなどと、そこに出てくる名前をつけたことが多かったが、最近の若い世代はキティ・トマトなどという名前らしからぬ名前をイングリッシュネームとして使っている人もいる。また陳果^{チャンゴ}（映画監督）のイングリッシュ・ネームはフルーツ・チャン、名前を英訳してしまったというユニークな例である。

イングリッシュ・ネームの習慣は、中国本土から香港に来た人たちも「郷に入りては郷にしたがえ」で、しだいに取り入れていった。大陸で使う普通語^{フーベンゴ}（標準中国語）と香港で使う広東語では、同じ名前であっても発音が違うが、イングリッシュ・ネームであれば、そんな混乱もおこらない。イングリッシュ・ネームは、まさに多言語地域における国際化の象徴といえるかもしれない²³⁾。

また、同じ韓国人の有名人でも、欧米式に「名→姓」の名前を使っていることも多いようです。たとえば、元フィギュアスケート選手のキム・ヨナ（金妍児）さんは、Yuna Kim として知られていますし、キム・ヨナさんの公式ウェブサイトでもそのローマ字表記が使われています。サムスン電子 CEO の高東眞（コ・ドンジン）さんは、アジア系メディアでは Koh Dong - Jin, 欧米メディアでは Dong - Jin Koh とされることが多く、ご本人は、より英語風に“DJ Koh”（ディージェイ・コー）というようにも名乗られています²⁴⁾。

このように、韓国では大統領のように母国式に「姓→名」とする人がいれば、有名人でも欧米式に「名→姓」を使う人もいて、誰もが一律に「姓→名」としているわけではありませんし、ローマ字の綴り方も自由、そうしたことを伝えずに、韓国ではすべての人が一律に「姓→名」のローマ字表記を使っているかのような印象を与える説明をして、だから日本人も皆、「姓→名」の順でローマ字表記をするべきだ、と主張しているのなら、それはミスリードというものです²⁵⁾。

ハンガリーは「姓名」の順であるが、ハンガリー大使館に問い合わせたところ、ヨーロッパの方式にあわせ外国向けには「名姓」としている、とのことであった²⁶⁾。

これらの国々においても海外向けに名前を名乗る時は「名・姓」表記であることが理解できるのではないだろうか。このローマ字表記において中国、韓国そしてハンガリーのこれらの国々でさえ、海外においては、「名・姓」で名乗っているにも関わらず、「姓・名」を主張する人達は、これらの事実は述べておられない。おそらくこの事実を理解しておられないのかもしれない。この事実を「姓・名」支持の方が理解されても「姓・名」式を主張されるのだろうか。私はこれらのことも含めて英語で名前を名乗る時は「名・姓」で名乗ることが世界の共通認識であり、これを根拠の一つと考えている。表記法が「姓・名」、「名・姓」という2種類存在するという異常な状況の中で、もはや「名・姓」が正当な表記法であると主張したところで元に戻すことは不可能であろう。関口（2003）の引用から今後どのように表記すれば良いのか、また学校でどのように指導すれば良いのかを考えてみたい。私の指導方法をここで述べておきたい。以下は藤原（2013）からの引用である。

しかし私達が、英語で名前を名乗る時、どういう人達と話をするのかと言うと、日本人と話をするために英語を使うのではない。英語を使う外国の人達と話をする時に使うのであって、相手も名前を名乗る時は当然のことながら「名・姓」で名乗ることを知っている。しかし「姓・名」で名乗る時、自分の名前を名乗った後、どちらが姓で、どちらが名であるかを説明する必要が生じる。そして何故「姓・名」という考え方がでてきたかという理由は、中国や韓国では英語でコミュニケーションをとる時も「姓・名」の順で名乗っていて、日本も欧米流に合わせる必要がないという考えが広まり、英語でも名前を名乗る時は「姓・名」で名乗れば良いということになり、現在のようになった。私は「名・姓」の順序で常に名乗ることにしている。理由は、英語という言語でコミュニケーションをする場合、英語の表現方法に合わせるのが自然なことであり、外国語でコミュニケーションをする場合は、それぞれの言語の表現方法に合わせるのが、言語を使用する上でのルールであると私は考えている。よって英語という言語においては、結論として「姓・名」で名乗ることは間違いであると考え。ただし、テストで自分の名前を英語で書きなさいという問題が出た時に「姓・名」で書いたとしても×にしたりはしない。それは君ら自身が自分の考えの下でそうしたと私は考えるから。ただ誤解しないでほしいのは、これは、「どっちでもいい」という指導ではないということだ。普通は、

ここまで説明すれば、どちらが正しい用法か理解はできると思う²⁷⁾。

私の指導方法には賛否両論あることは承知している。そして考えなければならないのは児童生徒が将来、海外に行く可能性が当然あり、彼らが海外では「名・姓」で名乗らなければいけないということを知らず、不利益を被り、トラブルに巻き込まれることのないようにしなければいけないという使命を教師は肝に銘じておく必要があるということである。そして現実問題として今後の指導方針を「名・姓」での記述について、先述の関口が述べている通り、記述においては、‘Kazuhiko FUJIWARA’を導入せざるを得ない。また口頭では‘I’m Kazuhiko, Kazuhiko Fujiwara.’と、まず名を名乗ってから、「名・姓」と表現するように指導しなければならないと考えている。もちろん指導書にはこのような指導は記載されていないが、「名・姓」表記を支持するならば、これからはこの指導方法を採用するべきである。

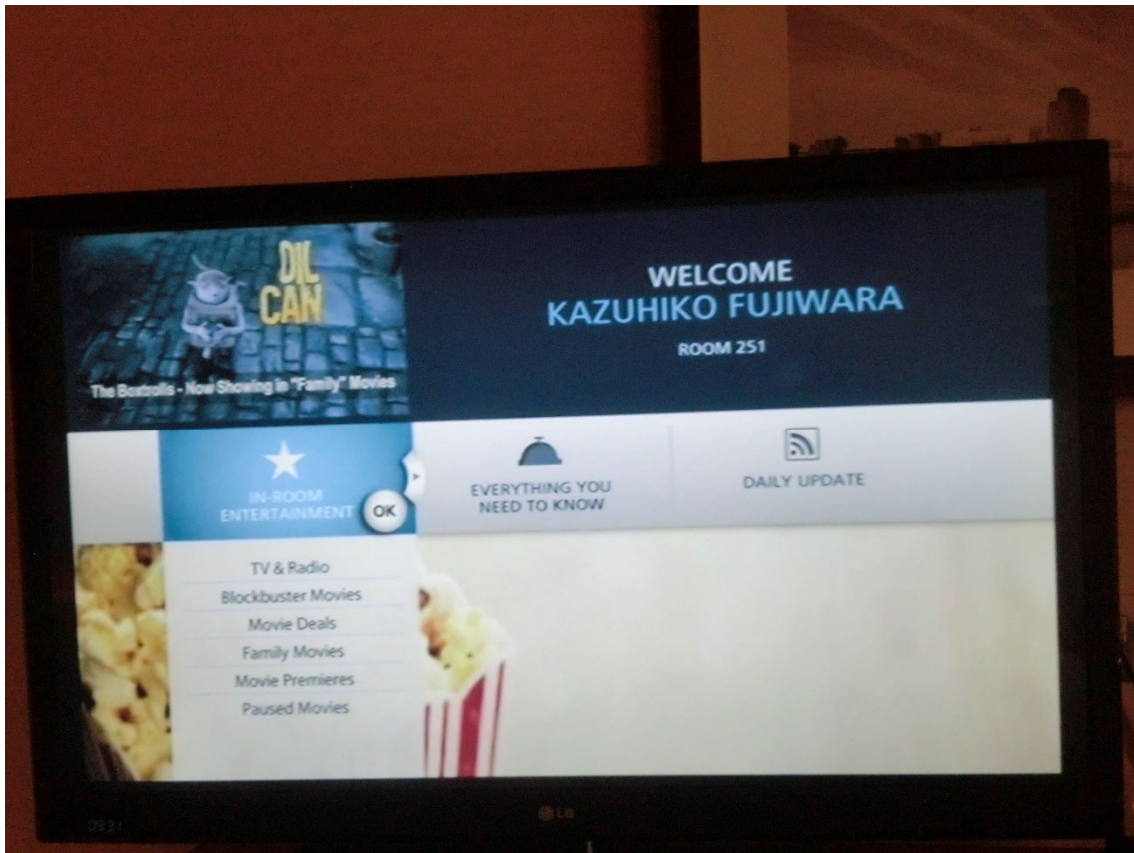
9. 終わりに

私は今まで英語で名前を表記する時は「名・姓」で表記することが当然だと考えてきたが、それが今や非常識になりつつあるということに正直驚いている。今回の執筆にあたり、「姓・名」主張派が圧倒的に多くなってきている状況の中で、「名・姓」の正当性を述べることは容易なことではないことが明らかになった。「姓・名」を主張することで世界は日本をどのように見るのだろうか。そして日本はこれから世界とどのように向き合っていくのだろうか。英語教師として長年勤務してきて、英語を通じて、海外の人達と接してきた。その経験の中で世界というのは、様々な違いがあることを知った。この名前の表記についてもその一つだと私は思う。しかし日本という国は周りを海で囲まれている島国。いろんな意味で違いを理解することが困難なところもある。実際英語を母語とする人達、もしくは公用語として使用している人たちは普通に「名・姓」で名乗っている。ここは日本だから、あなた方も名前を言う時は「姓・名」で答えなさい。ということにもなるだろう。しかしこういう考え方は戦時中の軍国主義的な思想のように私は感じる。先述したように海外では「右寄り」、「ナショナリズム」というように認識されるのだと実感した。私が考えていたことは決して間違いではない。しかしどうしても日本人の名前表記を「姓・名」で徹底したいのなら、世界中の全国家に通知を出して「日本人はこれから名前を名乗る時は、姓名で名乗るからあなた方も日本人の名前を言う時は、姓名でいいなさい。」と通知すべきである。日本人のどういう名前が姓で、どういう名前が名かということを世界中の人達が理解しているかどうかは、分からないが、これを徹底したいのなら、世界中に通知するべきである。しかし多様性が唱えられている中でこのような考え方は時代に逆行した考え方である、ただ韓国、中国のように「姓・名」で表記することが世界で認知されているところもある、他国においてはそれぞれの国の事情がある。また漢字文化圏において何かの手続き等で「姓・名」式で記述する必要がある場合はその通りにしなければいけない場合もあり、臨機応変に対応すればよい。日本においても「名・姓」で名乗ることを理解した上で「姓・名」で名乗るのであれば、それも選択肢としてあり得るということを書いておきたい。

注記

- 1) 文春オンライン「ファーストネームでお呼びしていいですか？」仏大統領夫婦と天皇皇后の「距離」が語る日仏関係 2019年6月26日
- 2) 関西英米文学研究会『英米文学手帖』51号(2013) 藤原の論文における読者の感想文
- 3) 清水浩『THE STUDY OF SIGNATURE ~署名の研究~』研究社(1922) p.11
- 4) 伏本賢一『「英語のなぜ？」』がわかる図鑑 青春新書(2020) pp.16-17
- 5) 関西英米文学研究会(2013) pp.30-31
- 6) ピーター・シュナイダー, 太田豊承訳『日本人英語へのちょっとしたアドバイス』(1989) p.15 大修館書店
- 7) 関口敏行『こんな英語の教科書は使えません』綜合法令 (2003) pp.55-56
- 8) 関口敏行『こんな英語の教科書は使えません』綜合法令 (2003) pp.56-57
- 9) 須田 稔『「国際化」と日本人氏名のローマ字表記—その現状・歴史・課題—』立命館産業社会論集 第24巻第1号 (1988) p.76
- 10) 小寺茂明『英語の中での日本人姓名の順序—英語式か日本語式か—』大阪教育大学英文学会誌 36号(1991) pp.47-48
- 11) (The Guardian 2019 5/22)
- 12) (The New York Times 2019 5/22)
- 13) ウェブサイト nippon.com 2019年6月13日 「Tarō Kōno か Kōno Tarō か?—日本人の英語表記を考える」
- 14) 関西英米文学研究会『英米文学手帖』51号 (2013) p.42
- 15) 須田 稔『日本人氏名のローマ字表記に関する意識状況—接論にたいする48氏の反応の記録—』立命館産業社会論集(1989)pp.198-199 p.203 *番号の記載は引用にあたって、引用元からの記載
- 16) 須田 稔『日本人氏名のローマ字表記に関する意識状況—接論にたいする48氏の反応の記録—』立命館産業社会論集(1989) pp.223,224 *番号の記載は引用にあたって、引用元からの記載
- 17) 酒井英樹 日本人大学生による姓名の順番の選択—英語の自己紹介も場面において— 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No.9 (2008) p.8
- 18) 須田 稔『日本人氏名のローマ字表記に関する意識状況—接論にたいする48氏の反応の記録—』立命館産業社会論集 (1989) pp.214-215
- 19) 鴻上尚史『Don Quixote's Pieced earring2 ドン☆キホーテのペディキュア』扶桑社 (1997) p.160
- 20) 鴻上尚史『Don Quixote's Pieced earring2 ドン☆キホーテのペディキュア』扶桑社 (1997) p.161
- 21) 鴻上尚史『Don Quixote's Pieced earring2 ドン☆キホーテのペディキュア』扶桑社 (1997) p.162
- 22) 鴻上尚史『Don Quixote's Pieced earring6 ドン☆キホーテのステップ』扶桑社 (2001) pp.256-257
- 23) 21世紀研究会編『人名の世界地図』文藝春秋 (2001) pp.221-222
- 24) サライ「姓→名」への変更は必要? 「名→姓」ローマ字表記は、実はとても日本的【世界が変わる異文化レッスン 基礎編15】
- 25) サライ「姓→名」への変更は必要? 「名→姓」ローマ字表記は、実はとても日本的【世界が変わる異文化レッスン 基礎編15】
- 26) 山形県立山形中央高等学校『ΣΧΟΛΗ—SKHOLE— (スコレー)』第13号 2007年6月8日 (金)
- 27) 関西英米文学研究会『英米文学手帖』51号 (2013) p.32

(图 1)



(图 2)

